令和 6 年度文部科学省委託事業

「教師の英語力・指導力向上のための実践的オンライン研修」

Module 1　事後タスク

授業実践後の感想

実践内容

中学校：　スモールトークの実践

高等学校：　技能統合型の授業でのディスカッション指導の実践

中学校

※研修で扱った指導テクニックを取り入れた教室では、多くの変化が起こりました。

- これまでは会話の途中で黒板やモニターを見てただ読んでいたものが、自分の言葉で伝える場面が多く見られました。
- 今まで質問をスクリーンに表示していたが、反復練習させることで、生徒たちが文字に頼らず言えるようになった。
- 指示を明確に出すことで、生徒たちが次何をするのか、どういうゴールに向かって取り組んでいるのかを意識して活動できました。
- Finger Drills は生徒が今まで以上に集中して音を聴き取り、リピートしようと意欲的に取り組む姿勢が見られました。
- フィードバックを取り入れました。初めてやったのにも関わらず、よいリアクションがあり、新出文法を使った質問をする生徒がいて、フィードバックをする甲斐がありました。
- 練習の際に Finger Drills を使用することで、1語足りなかったり言えていないときに自分で気づくことができていたので、正しい英文を覚えるのに有効的だと思いました。具体的には、指で数えながらやるので、最後言い終わった後に「指の数と自分の英文の単語が合わない。なんで？」と自分で気づく生徒が多くいました。
- トピックへの返答からさらに質問が展開していって長く会話が続くペアもいくつかあった。難しいながらも意欲的に活動に取り組んでいたので、これからも継続的に取り入れていきたい。
- 黒板に書かずに、back-chaining と Finger Drills のテクニックを用いて、反復練習させたところ、全体的に声が随分大きくなりました。おそらく今まで「適当に」英文を言っていたものを、正確に言えるようになって自信を持った生徒が増えたからだと思います。
- Finger Drills と Back-chaining を確認することで、より正確な文法を音とともに意識しながら発話する様子が見られた。いつもより、文法の正確性が増した様子でした。
- 会話の見本、考える時間の設定、質問の反復練習の仕方がいつもよりうまく進んだ。ただ会話をさせるだけではなく、生徒にも考える時間を十分に与え、反復練習をしっかり行うことの大切さに気づいた。
- デモンストレーションや練習を経てからスモールトークに取り組むことで、自信を持って会話に取り組んでいる生徒が多く見られた。またフィードバックを行い、2回目に取り組むことで、1回目の会話よりも豊かに表現できている生徒も見られた。スモールステップを通して取り組むことで生徒たちが自信を持って生き生きと英会話をする様子がたくさん見られた。
- 実践の初回から英語のまま理解しようと努める様子があった。継続したことで英語での場面設定や課題提示が自然に受け入れられる様子が見えてきた。

スモールトークのステップは、すべての生徒にとって効果的、という声も聞かれました。

- 上位層にはもちろん、英語が苦手な生徒にとっても意欲的に活動できるものだったかと思います。
- 不安に思いながら活動をスタートする生徒がいなくなりました。
- 今までは、質問がきちんと読めずに、たどたどしく質問する生徒が多かったことに気づきました。質問をきちんと反復練習させることにより、多くの生徒が自信をもって会話を始める様子が見られました。
- 指で語数を数えながら質問を提示しました。何語あるのかがはっきりとわかり、生徒の中には自分の指で一緒に数えながら練習していました。質問を何度も繰り返し練習させたことで、生徒に自信を持たせて会話をスタートさせられたと思います。下位層の生徒もスムーズに質問していたのがびっくりでした。指を使用することで、一語一語ゆっくり発音しながら質問文を導入することになり、スモールステップで活動に取り組めたのだと思いました。

継続することで、更に変化が現れるようです。

- 最初は半分以上の生徒が対話をつなげていくことができなかったが、トピックを変えて回数を重ねると、少しずつ対話を続けることができる生徒が増えてきたと感じた。
- すべて英語で、しかも口頭で説明し、視覚的な補助はジェスチャーにとどめました。音声情報が多く、最初は生徒に戸惑いも見れましたが、生徒は受け入れて会話を熱心に練習していました。モデルを示すことでいつもより生徒の発言が多く見られました。

課題としては次のような声があります。

- 会話を続けるという点では課題が残る。
- 質問に即興で答える力を伸ばすのが課題です。自分自身が生徒の対話のモニタリングがしっかりできていないことと、Small Talk にやや時間が掛けすぎたことです。早く慣れて、短時間で進めたいです。
- 生徒によっては，英語での言い方が分からずに日本語を使ってしまったり，ペアの生徒に質問の内容を理解させるために日本語で説明してしまったりする生徒もいる。生徒の個人差もあるが，英語での会話を成り立たせるための語彙や言語材料の習得に課題がある。

高等学校

A と B の二つのコースを設定、受講者の興味関心に基づき選択

- A コース: 生徒の英語力を伸ばすこと（イメージ：CEFR A1 や、A2 の生徒の力を伸ばす）
- B コース: 特にグローバルに活躍することが期待される層の英語力を伸ばすこと（イメージ：CEFR B1 以上を目指す生徒の力を伸ばす）

ディスカッション活動においてうまくいったことは次の通りです。

- 出だしの質問や、理由を問う部分、相手に同じ質問を聞き返す部分のフレーズを何回か練習した後に、実施したため、やり取りがスムーズにいった。(A)
- ディスカッションの前にブレインストーミングを入れたので、話す内容があった生徒が多かったです。(A)
- 疑問文や相づちを含めて練習した後にペアを変えて数回行いました。複数回行うことで、言える内容が増えた生徒がいました。(A)
- 一人で考える→アイデアを出し合う→意見を吸い上げる→ペアで話すという順にやってみました。今まで一人で考えて、話してみるだけだったので、生徒たちは不完全燃焼で終わっていたような気がしますが、一度吸い上げてフィードバックしたあとに同じような表現を使って実際に自分で話してみることで、自信をもって発話しているように見受けられた。(A)
- 質問の仕方や答える内容の例を丁寧に確認することによって、生徒が何から始めればよいかわからないということがなかった。(A)
- 一つ目は、今までワークシートを見て質問していた生徒が、練習を通して、相手の顔を見て質問する姿勢が見られた事。二つ目に、最初にディスカッションした際、こちらが想定した通り会話がうまく続かなかったため、あいづち表現の必要性を説明し、導入することができた事。（B）
- 日本語で最初にシェアすることによって、お互いに話す環境が整った。その後英語でその国の名前や、行きたい理由をどのようにいうか、またなんと質問したらいいのか生徒が主体となって考えることができた。足場架けをしてあげることにより、生徒の発話がうまくいくようになった。（A）
- 出だしの質問を何回か練習した後に実施したため、やり取りがスムーズだった。理由も付け加えて述べるように指示したので、さまざまな生徒の考え方を知る機会を得ることができた。（A）
- 生徒が使うであろう文法項目や語彙を導入してから活動できたことで、生徒の発話がスムーズに行われたこと。1つのテーマについて様々な選択肢を用意することで、繰り返し同じ表現を使いながら、別の事柄について理由付けながら話をさせられたこと。（A）
- 動画での指導があったように、質問をして、まずは自分で考え、ペアで質問をしながら考える、そして共有するといった流れを徹底したことで、自分の意見を持って交流することができていた。また、本テーマが「オリンピックを開催すべきか」という yes.no question であったが、なぜそう思うのかの理由を、事前にオリンピックの良い点・悪い点を全体共有し、その単語も学習していたことから、単語を積極的に用いて言おうとする姿勢がよく見えた。（A）

- 1分考える時間を与えたが、紙に書きだすことはさせなかった。これによって、自分の言葉で即興で返答させる環境が作れた。ペアで話させた後に新しいパートナーに「聞き取った内容」を伝えさせた。その際は雰囲気が活発になった。（B）
- ディスカッション活動において上手くいったことは、生徒が事前に練習した英語のフレーズや質問を使って積極的に会話に参加できたことです。また、バックチェーニングや Mumble ドリルといった練習方法を通じて、長いフレーズや質問を正確に覚え、使用することができました。（B）
- 「わかりやすいモデル」に沿って、応答ができたペアが、以前の活動時よりも増加したと思う。提示した「わかりやすいモデル」の応答に加えて、自主的に追い質問を行ったペアがあった。パートナーを変えて 3 回 Q&A をさせたところ、3回とも答えの言い回し、内容を変えて答えた生徒がいた。（B）

事後タスクの実践を通して、新たに学んだこととして次のようなことがあげられます。

- 教科書の英文をステップに分けて取り組むことで、深い学びができると感じた。（B）
- 生徒の発話を想定して、活動の流れや細かいステップを組み立てることの重要性。（A）
- 丁寧に足場をかけると、普段英語に苦手意識を感じている生徒でも話すことができる。（A）
- 教員が難しいと思う内容も、時に生徒は答えることがあるので、教員が勝手に限界を設定しないこと。（A）
- 生徒にとって身近な話題であると、語彙が少なくでもディスカッションをすることができるということを学びました。（A）
- 英語のフレーズの練習は短時間でも効果があることが分かった。（A）
- 生徒の意見を共有するための手立てとその準備が重要だということ。出てきた意見を臨機応変に Recast したり、Paraphrase したりして生徒に気づきを与えること。（B）
- 生徒は自身が想定していた以上の発想力を持っており、表現レベルも高かったため、さらに生徒の興味関心を引くトピックで、こちらで限界を決めず、進捗状況に応じて生徒の施行をさらに深堀するような追加質問等を行い、柔軟に対応していくべきである、ということを学んだ。（A）
- 質問文、応答、中学ですでに習っているようなフレーズでも十分に練習してからでないと実際の会話の中ではすぐに使えない。だから、練習が必要なんだと改めて理解しました。（A）
- 生徒同士が英語で表現できないと判断した途端に、日本語を使用していたり、私自身も突然の表現に対して日本語を用いてしまったため、オールイングリッシュの環境は生まれなかった。しかし生徒たちは楽しそうに活動に取り組んでくれていたため、今後もこの活動を各レッスンの導入に含ませていければと思う。（A）
- ディスカッション活動に限らず、指導の順番が重要であると学んだ。（B）
- 高等学校学習指導要領解説外国語編の「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に英語で表現する」ことに関して、論理的に自身の考えを表現することに対しての指導が不足していた。（B）